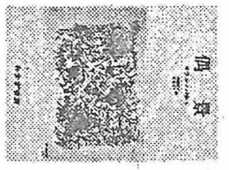
1989-34 1/5

産経新聞 夕刊
平成元年(1989年) 5月23日 火曜日

伊藤 章

著名な記号学者の異様な世界

ロラン・バルト著



著名な記号学者の異様な世界

ロラン・バルト著

伊藤 章

記号学とは、何か。

それは、ものごとを、ものごとの時代錯誤的な意味づけから、解放する。

ものごとの時代錯誤的な意味づけとは、ものごとを、ものごとの時代錯誤的な意味づけから、解放する。

ものごとの時代錯誤的な意味づけから、解放する。

ものごとの時代錯誤的な意味づけから、解放する。

『じぱんぐ』
毎日新聞東京本社社会部編

外国人労働者を求めながら差別する

毎日新聞社
一三〇〇円

〈評者〉鎖田 薫

新聞を読んで、ハラハラさせられるのは、「アジア人労働者狩り」ともいえる記事を目にするときである。

入管の警備員に同行した、「不法就労」摘発の記事をみると、子どものころの、朝鮮人部落での「密造酒の摘発」を思いだしてしまう。「暁の急襲」などの見出しが躍っていたような記憶がある。

どぶろく退治は、国家としての重要課題で、それらの記事は一罰百戒のみせしめを担っていたのであろうが、同時に朝鮮人を〝犯罪者〟としてみる視点をたしかにつくりだしていた。

いま、「不法就労者の摘発」の記事は、電車の中などで隣り合って座っているアジア人たちを、うさんくさいものとして見ることに加担していないだろうか。

たしかに彼らは、不法残留者であったり、資格外就労者であったりするかもしれない。

しかし、彼らは、彼らの労働力をもとめる日本側の要請にもとづいて入国し、低賃金で働かされているだけであって、なにも犯罪者集団の一員ではない。

とすれば、「外国人労働者」の問題を扱うルポルタージュは、外国人と日本人のあいだに根強くある、差別と被差別の関係を、本来的な人間的な関係に結びなおすために、両者の理解を深める方向にむかっているかどうかが問われていると思う。

毎日新聞東京本社社会部の『じぱんぐ』は、新聞に掲載されていたときから注目していた記事である。たしかに、ここにも、「入管摘発作戦」の記事がある。それでもこの本には、いまや日本の労働構造に完全に定着してしまった外国人雇用の問題を、さまざまな現場にたって考えようとする努力の跡が刻まれている。

アジアのさまざまの国を歩いて（わたしには、パキスタンやバングラデシュの報告が珍しかったが）、日本にむかう労働者の事情が明らかにされ、受け入れ側の日本の現実もよくフォローされている。

そして、最後に、受け入れの「原則禁止」から「原則自由」にせよ、など四点の提言がなされている。それにはわたしも賛成である。

これまで、東北などからの出稼ぎ労働者にたいする差別のひとつは、彼らがガツガツ稼ぐことにあった。寝る時間を惜しんで働かなければ、故郷にカネをもって帰れなかったからである。

その差別観は、いま海を越えて、人種にたいする差別観を助長させている。汚れ作業で賃金の安い仕事についているものはバカにされる。バカにされる仕事を「不法就労者」が担わせられる。二重のハンディである。

もしも彼らが労働力不足を補うために導入されているなら、国は同一労働・同一賃金の原則を守らせるべきである。

低賃金構造こそ差別の温床である。社会保障や住宅を保障すれば、「外国人労働力」の問題のかなりの部分は解決するであろう。

アジアからの労働者を「闇の労働力」としてコキ使い、矛盾を隠ぺいして、取り締まりだけをきびしくしている日本は、批判されて当然である。

おなじ人間として、おなじ労働者として、この外国からの出稼ぎ労働者とどう連帯するかの視点は、いまの労働運動にはほとんどなく、臨時工は本工の防波堤だったし、いまもそうだが、外国人労働者は経済大国の防波堤である。彼らの人権をどう擁護するか、その問いかけをもっと強く打ちだしてほしかった、というのがわたしのこの本にたいする不満である。

（かまた さとし・ルポライター）

『聴衆の誕生』
渡辺 裕

クラシックの制度への絶妙な切り口

春秋社
一六〇〇円

〈評者〉橋爪大三郎

私のように、とんとクラシックに素養のない人間も、最近の現象には首をかしげる。なぜかサティがはやる。マーラーが売れる。ブーニンの大人気……。ところがそれを感性の地殻変動として描き切る、好著の登場だ。いまは時代の曲がり角である。バロックからポストモダンにいたる《耳の制度史》。自分たちはいままで何を聴かされてきたのか。読者の目（耳？）から鱗の落ちる本である。

著者渡辺氏はまず、聴取のあり方に的をしぼる。音楽でなく、聴き方から考えるというのは迂遠なようだが、これが実は、クラシック音楽の制度を支えてきた社会的条件をあぶり出す、絶妙の切り口になっている。

そのうえで氏は、三つのトピックをとりあげている。

第一に、一八世紀の末から一九世紀にかけて、いわゆる聴衆が誕生したこと。音楽文化の担い手が、貴族から市民階級（音楽愛好家）に移った結果、真面目な聴取態度やコンサート・ホールの演奏会、巨匠の神話が定着する。それ以前は、同時代の曲ばかり演奏して、しかも社交のつけたりみたいだった。それが今度は、過去の大作曲家の作品ばかり演奏する、というふうに変わっていく。ベートーベンが巨匠にふさわしく、だんだん深刻な顔つきに描かれるようになったという話も面白いし、軽薄なノリが排除されたというのも、さもありなんである。

第二に、一九二〇年代の、聴取態度の動揺。音楽の複製手段が現れると、それをたちまち消費文化が組みこんでいった。アメリカで普及した自動ピアノは、レコードやラジオのかげに隠れがちだが、演奏――聴取の結びつきを解体してしまう装置のさきがけとして、注目に値する。

第三に、最近わが国でも顕著になっている聴衆の崩壊。古楽器ブームやグールドのピアノ奏法、キャスリーン・バトル現象、環境音楽ブームといった、一見脈絡のない現象の底を探ると、聴取のあり方が根本的に変質してしまった事実が見えてくる。構造主義は、テキストを差異の束に解消し、「テキストは伝達のためにある」と信じる機能論を粉砕した。同様に、音楽作品を差異の束に解消してしまうのが、いま起こっている聴取の変容である。

上すべりしがちな題材を、骨太の構図のなかに収めていく著者の手腕に、拍手を送るのは私だけであるまい。書名こそ『聴衆の誕生』だが、本書は、クラシックを支える聴取の制度の誕生から崩壊までを見渡す、本格的な音楽社会学の業績だ。

巨匠・天才・作品・精神性・美。そんなごてごてしいクラシックの粉飾に、音楽を閉じとめてきた聴取のあり方。それを批判する著者の気迫が行間ににじみ出る。そういう垣根をとり払い、音楽を楽しむ感性をとり戻すこと。そこに新しい出発点を求める著者に、若々しさを感じた。もっとも、クラシックの価値こそ永遠だと信じたいむきは、苦々しい思いで本書を読んだかもしれないが。

クラシック研究の最新動向を縦横に参照しながら、消費社会論、複製芸術論、記号論なども使える部分は使って、本書は優れた同時代論になっている。それでも、コンパクトにまとめるという制約のため、も少し書きこんでもらえたらという思いも残った。

本書があえて省いたポピュラー音楽については、やはり近ごろ出版された『音楽する社会』（小川博司著、勁草書房）『ニューミュージックの美神たち』（竹田青嗣著、飛鳥新社）あたりをあわせ読むと、いっそう得るところが多いに違いない。

（はしづめ だいきぶろう・社会学）

大阪堂書店

新刊案内

さようならの事典
窪田般彌・中村邦生 編著
映画・芝居の別れの名文句、失った愛の詩、名高い辞世、墓碑銘の傑作…様々なさようならを英米仏の文化に探る別れの言葉事典。
四六判・上製函入・324頁 定価2,060円(税込)

漢字百話
食・味事典
《食・甘・辛・香・鹵・皿の部》
神吉拓郎 監修
漢字を通してグルメの世界へ…。「食べる」「甘い」「辛い」。食・味のことなら何にでも通じてしまう〝漢字グルメ〟の本。
B5判・160頁 定価1,860円(税込)

スタンダード
英語語源辞典
下宮忠雄 金子貞雄 家村睦夫 編
固有名詞を含む重要語約7000語について、語源にまつわるエピソードにもふれながら、最新の研究成果をとり入れて語源をあとづけた。
B6判・上製函入・600頁 定価5,150円(税込)

〒101 東京・神田錦町3-24 振替/東京9-40504

学術思想

江原由美子・長谷川公一・山田昌弘
天木志保美・安川一・伊藤るり／著
ジェンダーの社会学
女たち／男たちの世界

こんな教科書ほしかった！

挑戦の意気ごみがひしひしと伝わる

橋爪大三郎

「こんな教科書ほしかった！」ひからびた社会学にうんざりの、全国の学生諸君お待ちかねのテキストの、ついに登場だ。快挙である。これを読めなかった私の学生時代が口惜しい。

〈社会学入門でもあり、読物としても面白い本。普通のごくささいな日常生活から、社会とは世界とは何かを考えられたら、きっともっと社会学が面白くなるだろう。……二転三転した議論の末、私たちは大冒険に乗り出した。「ジェンダーだけをモチーフにして、社会学の入門書を書いてみよう」。〉――著者を代表して江原由美子さんは、こんなようにのべているが、その思いは半ば以上達せられていると言えよう。

ジェンダーとは〈生物学的な性別……と区別された、社会―文化的性別〉のこと。なおかつ「ジェンダーの社会学」は、女性の視点にこだわるフェミニズムと一線を画す。〈本当は、男性も女性も同じくらいジェンダーに「囚われて」いる〉のだから。本書は男女を問わず、自分の足もとから社会と人生を見つめ直すための、格好の水先案内だ。

さて、江原さんはじめ六人の執筆者が分担するのは、日常生活／政治社会／家族／労働／世界社会／感性リアリティ、の各章。社会学を学び始めたばかりの若い学生諸君が、自分の経験の範囲内で無理なく理解できるテーマを、ゆったりとカヴァーしている。文章の語り口も、著者からの個人的メッセージとして、読者に届くよう配慮してある。

この本で出色なのは、これまでの常識をくつがえし、知識は知識にすぎないと、コラムに追いやってしまったことだ。そうしたコラムや、キーワード、研究ノートといった囲み記事だけ拾い読みしても、ちゃんといまの社会学の輪郭が摑めるようになっている。そのかわりに本文では、社会学の考え方（リーズニング）を分かりやすく噛んで含めるように紹介してある。それも、集中力の限度を越えないように、数ページずつのブロックに区切って。参考文献、図表のあげ方も神経が行きとどいているうえに、柴門ふみさんのイラストが、若々しい感覚を随所にちりばめて、ページを繰るのがなおのこと楽しい。

――という狙い線が、手にとるようにわかって、それに共鳴した。実際の出来ばえを率直に言うと、各章ごとにばらつきがあり、全体の調整も必ずしもうまく行っていなくて、だいぶ改善の余地がありそうである。まだ工事中、ということだろう。

だが、それはそれとして、著者たちの挑戦の意気ごみは、やはり読者にもひしひしと伝わるはずだ。特に冒頭の数十頁は、映像的な手法が成功して、作品としても優れており一気に読ませる。本書がきっかけとなって社会学を見直す人びとの輪が広がり、やがて中級の読み物、一線の研究書へと、手が伸びていってくれればいいなあと、楽しい夢をみたくなる。

というわけで、教科書として今のところ、本書は他の追随を許さないが、これ一冊ですむかという問題もある。テーマや切り口の点で、社会学全体からみてバランスを欠いているのは確かだ。それが気になる人もいるだろうが、総花的に何でも取り上げ、著者の顔が見えないこれまでの教科書にくらべれば、断然こちらをとるのが正しい、と思う。ただ、本書を補ういみでも、別な方向へのかたよりをもった教科書が、真似でもいいからあと何冊か出てほしいのだが。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学助教授・社会学専攻）

A5判・251頁・2400円

新曜社

特集 一年間の収穫から

哲学 思想 ベストセラー 50

哲学

野家啓一

枝下隆英著『認識と価値』（東京大学出版会）。英米哲学の分野で定評ある仕事を積み重ねて来られた著者の満を持した第一論文集。言語分析という地道な方法で「同一性」「因果性」「事実と価値」といった古典的問題を解きほぐす著者の一貫した姿勢は、哲学の流行思想化に対する頂門の一針と言うべきであろう。

鷲田清一著『分散する理性』（勁草書房）。現象学といえば「フッサール研究」を意味するわが国にあって、著者は〈事象そのもの〉に肉迫する努力を怠らない数少ない現象学者の一人である。「経験」や「日常」といった〈自明性の謎〉に挑むしなやかな文体は、同時に哲学的ファッション論モードの迷宮（中央公論社）を紡ぎ出した。

橋爪大三郎著『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）。高橋源一郎風に言えば、「社会科学がこんなにわかっていいかしら」と思わず叫びたくなるような快著。「日本国憲法」「マルクス主義」「天皇制」から成る三題噺を、著者は平明達意の歯切れよい文章で鮮かに解き明かしてくれる。（のえ・けいいち氏＝東北大学助教授・哲学専攻）

倫理学

川本隆史

僕の守備範囲で負の収穫の最なるものは、ロールズの正（確な意）義を伝えてくれない翻訳が「熱い要望に応え」そのまま復刊されたことだろう。でもいい本に出会いもした。

橋爪大三郎著『冒険としての社会科学』（毎日新聞社）は、全共闘の敗北の仇を社会学でとろうとした著者が、日本国憲法とマルクス主義の明暗を見据えながら書いた、社会科学のすすめ。平明体にますます磨きがかかり、社会認識に裏打ちされた多元的モラルの提唱にも説得力がある。

森村進著『権利と人格』（創文社）は、権利や個人の異質性を重視する立場と、社会道徳に関しては個人を超えた場（帰結）でことの善し悪しを判定すべきだとする立場との統合を企てる、力作。自前の規範理論の提出をめざそうとする心意気を買いたい。

鷲田清一著『分散する理性』（勁草書房）は、文献から〈ことがらそのもの〉へ〉現象学の視線を向け直そうとする好著。ファッションの次に著者が何を標的にするか、楽しみだ。（かわもと・たかし氏＝跡見学園女子大学教授・倫理学専攻）

1989-34 4/5

「現代詩手帖」第32巻10号（1989年10月）

BOOKS

古きよき学問への挽歌

内田芳明『思索の散歩道』（思潮社・二四〇〇円）

橋爪大三郎

文化史・思想史・ヴェーバー研究にかずかずの業績をあげた内田芳明氏の、随想集である。《随想は人間性の自由と遊びの世界であると思う》と語る著者が、《いつも楽しい気分で書いた》（「あとがき」）三十篇あまりの文章は、研究生活の折々の息づかいと、やわらかな追憶を包みこんで、読者を懐かしい時代に誘いこむ。

都市と自然の景観にスポットを当てる「I風景への散策」。太田省吾や鈴木忠志の劇的世界にふれる「II文化への散策」。大塚久雄、矢内原忠雄ら戦後知識人たちとの交流をつづった「III出会い」。わが国のヴェーバー研究の周辺」。この四部構成を順に読み進むと、著者のゆとりある精神世界の拡がりを、読者も追体験できたような気持になる。《「散歩」には一つのリズムがあって……「風景」という生の構造のリズムともなっている。……そして「思索」というものも、これと似た構造を持っている》（16頁）。それらがいま急速に失なわれつつあるという焦燥が、この本を世に送り出すきっかけとなった。

内田氏は学徒動員世代。戦後の物質的窮乏の時代を、社会科学への情熱を糧にくぐりぬけてきた。なにより幸いだったのは、わが国のもっとも良質なヴェーバー研究者たちと、全人格的で倫理的な緊張関係をとり結びながら、自分の学問を掘り下げてゆけたことだろう。それはそのまま、戦後社会科学の歩みとも重なっている。

氏の回想によると、絶頂は一九六四年、東大で開かれた「ヴェーバー生誕百年記念シンポジウム」だった。日本中から有数の学者、のべ七百人を集めた会場は、例のない興奮に包まれ、ヴェーバー研究の到達点と現代的意義について、白熱の討論が繰り広げられたという。その後、近代社会の合理化・官僚制化を見通したヴェーバーの予言を裏づけるかのように、巨大な変化のうねりが世界を呑みこんでしまう。《この激変に対応して、百年記念の時に結集した日本の社会科学の指導的な人たちの言説は後退した。》（278頁）そして、70年の学生叛乱、さらには80年代のポストモダンの登場をへた今日、著者の境位はどのようなものであろうか。

著者があらためて目を向けるのが、〝風景〟である。風景はエコロジーと違い、成熟した西欧市民階級の教養と文化とを背景にして、歴史的に形成されたものだ。都市と自然との共生関係。産業文明・資本主義を主導する個人主義・効率主義と、市民階級が育んできた連帯・共同態的原理とが調和することの、象徴のようなものだ。ここに立脚して、文明と資本主義の横暴を再点検する可能性を、著者は構想する。

これをただのナツメロと片づけ、一顧だにしないというポストモダン流のやりくちもありえよう。むろんそれは、ほめたやりくちでない。そもそもポストモダンの、どこが近代主義よりましだと言うのか。

ただ内田氏が、後退戦に追いこまれていることも確かなのだ。わがもの顔の消費文化とポストモダン。そんなものに押されてなぜ、戦後知識人の言説が《後退》してしまったのか？　そのあたりの原因を内田氏が自らどう受け止めているのか、本書からうかがい知ることはむずかしかった。それを掘りさげたあとの、巻き返しの言説であってこそ、読者を本当の随想三昧に導くこともできるのだと思う。

産経新聞　夕刊　平成元年（1989年）6月27日　火曜日

産業文明とポスト・モダン

混迷を抜け出す活路をさぐる

佐伯彰一

情報やサービス産業の拡大が、ただちにわれわれの生活の質の向上へと結びつくかどうか、疑問に思う。

第一に、市場が膨張し、ちまたへ拡大して、われわれの生活を「市場の枠外にあった」ものまで、商品化してしまう。怒られそうだが、中心になる問題は、このあたりの事情に尽きる。

相ほぼ一致するであろう。

けれども、産業文明の本質は、ポスト・モダンの論者たちが、ことごとく、指摘するように、産業社会の、いちばん新しい補注、多様に切りわけ交叉が成りたつ。

伯陵氏の鋭い経済学者、佐藤誠氏、まったくポスト・モダンの考え方を考えるとは、スペクタクル（はなやかな現代の見世物）の群れを、ふ、産業社会の、いちばん新しい補注、多様に切りわけ交叉が成りたつ。

ポスト・モダンの論者たちは、産業文明の、ハイテクノロジーの、高度市場社会を、ポスト・モダンの、ソフィスティケイトされた、ポスト・モダンの、ソフィスティケイトされた、ポスト・モダンの、ソフィスティケイトされた

東京、ながい夢

猪瀬直樹著

崩御を機に東京、昭和を考える

『天皇の影法師』『ミカドの肖像』など、たて続けに問題作を世に問うているノンフィクション作家、猪瀬直樹氏の書き下ろし。一月七日の天皇崩御、二月二十四日の大喪の礼の両日をピークとする東京の表情を、的確な筆致と写真で、虫ピンでとめるように蒐集（しゅうしゅう）した記録編である。撮影は、写真集『東京』などで知られる北島敬三氏。廃墟とも未来都市とも見まがう東京の一瞬の非日常を、ピンホールカメラで狙ったみたいな即物的なたたずまいに写しとる。

猪瀬直樹氏

《いちばんはやく未来にたどり着くのは…東京かもしれない。欧米の都市は、東京に較べるとあまりにも正しいプロセスを踏みすぎている》。この野放図な東京の最も先端的な部分（サイバーシティー）と伝統的な部分（インビジブルシティー）とは、どのように複合しているのか、そこに内蔵すべく猪瀬氏は、ものごとの表面とディテールに拘泥する。微細な観察とエピソードの積み重ねにより、天皇という空虚な中心をめぐって回転する東京、いや日本という全体を浮かび上がらせる作戦なのだ。

この行き方は、ともすれば散漫に拡散してしまう危険と背中合わせでもある。だがそれを敢えてする猪瀬氏は、事実に語らせる腕力にかけて、同時代の誰にもひけをとらぬという自信がある。加えて東京（日本）は、目に視える構造や明示的な思想で形づくられていないらしいのだ。われわれの天皇制は、局在する何ものでもない。それを気付かせるように、猪瀬氏の文章はさりげない。観察者の淡泊な関与を表に立て、天皇制が日常に与える亀裂（自滅）を書きとめていく。

昭和という時代も結局まとまりのつかぬまま、過去のページに埋もれようとしている。そんな時猪瀬氏のような、天皇への持続的なこだわりは貴重だ。《敗戦直後の憲法改正で、天皇および天皇制が大きく変質したとする…錯覚を…訂正しなければ、と僕は考えていた》。彼の仕事は、天皇の国日本が、安易な想像の及ばないかたちでわれわれの上に拡がっていることを、改めて気付かせてくれる。と同時に、われわれの知の内部に、実は大きな欠落が隠れていることも。

思想というものは本来、自分を包みこむ社会の全体を遠望できるもののはずだが、その種のものをわれわれは持ち合わせていない。当分の間は、見慣れぬ事実の衝撃に揺さぶられ続けるしかあるまい。

逆に言うと、思想の地歩を一歩ずつでも前進させようと全力を傾けるあたりから、猪瀬氏の仕事はものごとの表面に終始し迂遠（うえん）でないか、との声も上がりそうだ。たしかに猪瀬氏の仕事は、天皇制の解剖学でも病理学でもない。しかし、いらつくには当たるまい。構造的な理解に先立ってまず必要なのは、診断学ではなかろうか。この本は、猪瀬氏が多少の苛立っ気をこめて投げた変化球である。悔しかったら、どうとでも打ち返したらどうだろう。（河出書房新社・二〇〇〇円）

社会学者　橋爪大三郎

1989-34 5/5

産経新聞　夕刊　<第三種郵便物認可>

橋爪大三郎が読む

消せない国家権力

琉球弧の喚起力と南島論

吉本隆明著
（河出書房新社・一八〇〇円）

吉本隆明氏の『南島論』（一九七〇年）は忘れえぬ論文だ。そこで私は、初めてレヴィ＝ストロースの親族理論の概要を知ったわけだし、構造人類学が社会学への入り口になるという強い示唆も受けたのだ。

その吉本氏が、今また、南島論へ立ち帰るという。

南島論は、都市論とペアになるものだ。

都市論は、現代の最も高度な都市が、国家の枠を否応なくはみ出していくことをのべる。いっぽう南島論は、天皇制や国家が生まれる以前の《基層》を掘り下げる。つまりどちらも、人類が国家なしに生きられることを論証する。

都市論のキータームは「アジア的」に加え、吉本氏は新たに「アフリカ的」を追加した。これは今の第三世界にもあたる。アフリカ的段階の都市は、アジア的、ついで西欧的な都市に変貌していくのが、自然史的な必然だという。《アフリカ的段階…を普遍的な概念として追加して南島論の基層を掘り下げ…天皇制を越える…人類の普遍的な…原型…とぶつかることができるんじゃないか》

こうのべる吉本氏に対して、一緒にシンポジウムに参加した赤坂憲雄氏は《吉本氏が…依拠するヘーゲル的な人類史の普遍性に対して…戸惑い》を隠さない。私も同様に感ずる。

大きな「歴史」を考え、そのなかで天皇制の、さらには国家の生成と死滅を見届けようというのが吉本氏の基本戦略である。だが、起源に遡れば、それを無化できるのか。国家の本質が共同幻想だとしても、それはわれわれの社会の強固な現実として、多様な機能をもつ。ただそれは今、疎外論、幻想論で語るべき対象なのか？　権力はなにかの間違いでうまれただけのもので、歴史が進めば消滅するものなのか？

権力の制度―政治権力のあり方が、時代とともに変化するのは当然だ。そこには「悪しき権力」や、社会の実態にそぐわぬ権力もあろう。国家がそうならそのつど問題にすればよい。

都市が国家をはみだすように見えるのは、経済や交通や情報の回路が、国家の範囲を越えてますます拡がっているためである。この傾向が続けば、やがて国家を解体しなければならなくなるのは目に見えている。だがそれは、国家をもっと普遍的な権力の制度に造りかえることのはずで、権力をきれいさっぱり地上からなくしてしまうことではないはずだ。

日本本土とまったく異なる歴史的経過をたどった南島は、興味のつきない場所である。しかし南島論が、吉本氏の戦略をまっとうするかたちで成立するかは、また別の話だ。赤坂氏の言う通りに、南島論の「第二章」は、もう吉本氏の手を離れ、万人の書き継ぐべきものになったのだろう。

（はしづめ・だいさぶろう＝東工大助教授）